雑誌『兵隊』に掲載された中国現代文学作品

宮　本　めぐみ

1．はじめに

雑誌『兵隊』（7号までは『へいたい』）は1939年5月1日に日本陸軍の「南支派遣軍」報道部が創刊した兵士向けの機関誌である。[1)] 月1、2回刊行され、途中戦況の悪化等で数回の休刊を挟みつつ、1944年5月1日発行の39号まで続いた。[2)] 初代編集長は芥川賞作家の火野葦平[3)] で、広東にて編集・印刷され、現地の部隊に配布・回覧された。兵士たちに投稿を呼びかけて作品を募集し、集まった原稿を軍の報道部所属の兵士たちが編集した点に特徴がある。内地の作家・画家の寄稿も受けたし、回覧後の雑誌が内地に送られたり、残部を広東で販売したこともあったようだが、基本的には戦場にいる「兵隊の兵隊による兵隊のための雑誌」[4)] であった。

この『兵隊』28号（1943年3月1日）に「中国現代文学選」という特集があり、謝冰心「冬児姑娘」、凌叔華「小英」、欧陽山「傑老叔」の日本語訳が掲載されている。中国戦線にて従軍中の兵士たちに対し、この時期に中国現代文学作品が紹介されたというのは驚くべきことである。筆者は日本における謝冰心作品の受容について調査しているが、『兵隊』に謝冰心作品が掲載されていることはこれまで知られていなかった。

本稿ではこの『兵隊』及び「中国現代文学選」に収録された3作品について紹介し、日本陸軍の兵士向けの雑誌にこのような特集が組まれた背景と、その意義について考察したい。

2．雑誌『兵隊』について

『兵隊』創刊号巻頭の司令官安藤中将の「発刊を祝して」によると、この雑誌の使命は「戦友互に心境を吐露し、紙上に心の友を求め、或は励まし、或は慰め、以て精神修養の一助たらしめると共に、愈々鞏固なる団結を結成するに在る」という。続く軍報道部長の「発刊の辞」にも「兵の不撓の勇気と、崇高なる犠牲心とが更に一段の高き教養と、ゆとりある緊張を培養するに役立つ様、此の雑誌「へいたい」の生長と発展を衷心希求して止まない」とあり、軍司令部が兵士たちの投稿と閲覧を奨励していたことがわかる。戦場にある兵士たちというと、文化的生活とはほど遠い環境に置かれているイメージがあるが、文学作品を読み、自ら作品を創作・投稿する時間が与えられ、教養を高めることを求められたのである。

『兵隊』には詩や小説、短歌、俳句、日記、漫画等、実に多種多様な作品が投稿されており、多くの「書く兵隊」[5]が存在したことがわかる。『兵隊』は「戦友がたがいに心境を吐露し、心の友を求め、慰め励ましあう場（中略）前線の兵隊が兵隊としての心を確かめ、精神を高め、戦友同士の絆を結び合う器」[6]であった。自分の作品が雑誌に掲載されるのは栄誉なことであったし、掲載作品には作者名だけでなく所属する部隊名も記されたので、同じ部隊の仲間の作品を目にする楽しみもあったと思われる。

中野綾子によると『兵隊』の「編集者は火野によるスカウトや優れた投稿者の中から選出され（中略）編集室には文学を志すある種特権的な場が作られていた」[7]という。誌面には編集者の意向が色濃く反映された。当時の兵士向け雑誌には『兵隊』のほかに『陣中倶楽部』もあったが、総ルビで大衆的な『陣中倶楽部』に対し、『兵隊』はルビ無しで教養主義的傾向がみられ、リテラシーの高い兵隊を重視する誌面を作った。編集者は投稿作品の中から『兵隊』に相応しい作品を選び、時には自らも執筆し、内地の作家からの寄稿も受けた。「各部隊に一冊配布された『兵隊』は、交代で共有しながら読まれ、教科書にする部隊もあった」という。[8] つまり『兵隊』は単なる娯楽のための同人誌的な読み

物ではなく、文学的・教養主義的傾向を持つ特権的な編集者によって編まれた、教科書にもなりうる雑誌だったのである。

『兵隊』24号から32号（1942年５月－1943年10月）の編集を担当した石田一郎[9]によると、『兵隊』は「まったく検閲のない無制限、自由執筆、自由編集の雑誌」[10]であり、編集は「治外法権」[11]だったという。原田勝正も「『兵隊』は、内務省の検閲から完全に自由な出版物だったのである。内務省の検閲のために義務づけられる「納本」は実施しなくてよい。活版印刷の出版物はすべて納本・検閲を必要とするという制度から免脱するために、官庁などが部内出版物をつくるさい、印刷方式を部内用の謄写印刷に代用したものであるという意味でつけた「印刷を以て謄写に代ふ」という表示も、この『兵隊』では不要であった。以上のように内務省の検閲制度から自由で、しかも投稿の記述内容には軍当局も介入しないという自治体制、二重の意味で『兵隊』の投稿者は表現の自由を保障された」[12]と述べている。

日本における言論・出版の自由は、「出版法」(1893年)、「新聞紙法」(1903年)、「治安維持法」(1925年) などによって厳しく制限されてきた。1920年代より『改造』、『文芸戦線』など社会主義的傾向の見られる雑誌がたびたび発禁処分を受け、1933年にはプロレタリア作家の小林多喜二が特別高等警察（特高）の取調中に死亡。1938年には石川達三の小説「生きている兵隊」が発禁処分となり、石川と編集者が有罪判決を受けている。同年「国家総動員法」が制定され、言論統制はさらに強化された。1942年から45年にかけては、共産主義的な活動をしたとして編集者・新聞記者らが多数検挙された「横浜事件」[13]が起こる。この事件の端緒ともされる細川嘉六の論文「世界史の動向と日本」（雑誌『改造』1942年８、９月号に掲載）を摘発したのは陸軍報道部であった。[14]戦時中の言論統制においては、特高のみならず軍もその強い権限によって大きな役割を果たしていた。畑中繁雄によると、戦時中言論統制を担った内閣情報部（1940年12月に「内閣情報局」に改組）には現役の陸海軍将校が派遣され、重要ポストのほとんどを独占したという。将校らは「雑誌、出版懇談会」の名目で、毎月１、２回出版社や雑誌社の編集責任者（時には社長、幹部）の参集を命じ、差止め

事項の通達や編集内容への注文、各雑誌に対する「講評」をおこない、言論指導、思想戦指導の名のもとに編集企画内容に干渉した。[15] 一方、『兵隊』は陸軍報道部のいわば身内の雑誌であるがゆえにそうした干渉を免れ、自由な編集環境を保つことができたのである。

上述の『兵隊』創刊号「発刊を祝して」は「宜しく編輯者読者共に一体となつて、克く「へいたい」の真使命を自覚し、軍の一異彩として本雑誌の効用を十分に発揮すると共に、反面に於て苟くも軍の威信を失墜し、或は防諜上苟くも軍機を漏洩するが如きことのなき様、細心の注意を払はんことを切望する次第である」と釘を刺しており、中野も「戦場にあって個人による自主規制が存在しなかったとは考えにく」く、『兵隊』の記事からも報道部による「検閲の存在は明らかである」、「投稿制度は一見開かれているようにみえるが、その内容は自由なわけではなく、むしろ検閲での削除を忌避する心情が働いたことは想像に難くない」[16] と指摘している。筆者も『兵隊』が一切のタブーなく、どのような内容でも自由に掲載できたとは考えない。だが、例えば『兵隊』35号には中国人にとって自分たち日本兵の姿は「異様な浸入者と映つたかも知れない」と書いた作品[17] が掲載されており、11号には中国兵を銃撃して、銃剣を突き立てたら、「まだ十七八の可愛らしい顔をした良家の子どもらしい少年兵で（中略）見つめてゐる内にだん／＼可哀想になつて来た。こんな若い兵隊だつたら殺すんぢやなかつたとも思つて見た」と後悔の念を記した作品[18] も見られる。14号には戦死した抗日ゲリラの女性兵士を悼む詩が掲載されており、詩中には「日本鬼」という言葉さえ使われている。[19] 内地であれば編集者が伏せ字をほどこすか削除したであろう日本人に対する蔑称が、そのまま掲載されているのである。捕虜を描いたものや、中国人に対する日本兵の態度を批判したものも散見され、『兵隊』が内地とは異なる編集環境にあったことは確かだと思われる。こうした『兵隊』編集者のある種特権的な立場は、以下に紹介する「中国現代文学選」からも見て取ることができる。

3.「中国現代文学選」について

「中国現代文学選」は『兵隊』28号（1943年３月１日）の30頁から46頁まで、全17頁の特集である。28号の総頁数は表裏表紙やグラビアを除くと64頁あるため、およそ４分の１を占めている。中国現代文学作品が掲載されているのはこの号のみで、特別企画と言えるだろう。目次には「中国文学選……訳・吉武修／冬児姑娘……謝冰心／小英……凌叔華／傑老叔……欧陽山」（原文は縦組みで、「/」は改行）とあるが、本文のタイトルは「中国現代文学選」となっている。冒頭に１頁分の解説があり、次頁から「冬児姑娘」４頁、凌叔華「小英」４頁、欧陽山「傑老叔」８頁の順に掲載されている。３作品共に挿絵がほどこされており、「冬児姑娘」と「小英」は茂木武[20]、「傑老叔」は編集者石田の描いたものである。

訳者の吉武修の詳しい経歴は不明であるが、『兵隊』の復刻版を出版した刀水書房の出版目録『刀水』No.6に、石田と大濱徹也、鈴木正夫の鼎談が掲載されており、吉武と「中国現代文学選」について語られているので紹介したい。

> 鈴木「それから第二八号を見てびっくりしたんですけど、二八号というとちょうど先生が編集された頃ですね。（中略）これに中国現代文学の紹介が、『中国現代文学選』というのがあるんですよね。しかもこれは支那じゃなくて中国といってるのも珍しいんですね。（中略）翻訳者は吉武って書いてある。吉武さんってどういう人ですか。」
>
> 石田「これは幹部候補生の下士官で外語の支那語を出た人が報道部にきたんですよ。新聞班、宣伝班などがいたわけですけれど、その一人の吉武さんという人に翻訳してもらったわけです。」
>
> 鈴木「これは非常に珍しいです。この時代にこういうものがこういうところに、キチンとした文学作品が載ることが。」
>
> 石田「ですから『兵隊』編集室というのは、なるべくそういう人たちを仲間にしてやってたわけです。」
>
> 鈴木「こういう企画を考えた事自体もちょっとびっくりしますが、兵隊

の雑誌にそういうものが載ったというのも珍しいですね。」

石田「中国文化というようなものの紹介という事も、ある意味では兵隊の生活環境への関心と理解、近親観を誘うため、具体的には広東の今日の生活文化・習俗の紹介なんて事をずっと続けているわけです。」

鈴木「その一環として？」

石田「ええ。」[21)]

「外語の支那語」とは東京外国語学校の支那語科のことであろうか。中国語のできる人材が報道部に配属されたので翻訳してもらった。つまり広東で翻訳作業をおこなったということである。その上で、「中国現代文学選」は兵士たちに自分たちの駐留している地域への関心と理解を深め、親近感を養ってもらうために企画したもので、広東の生活文化や習俗を紹介してきたものの一環であると述べている。

この石田の説明はかなり不十分なものである。「中国現代文学選」の3作品のうち、「南支派遣軍」の兵士たちの駐留地広東周辺を描いているのは、「傑老叔」だけだからである。この点については次章で触れたい。また、石田は吉武による翻訳であることを強調しているが、吉武が訳したのは「冬児姑娘」のみで、「小英」、「傑老叔」は他書からの転載である。「小英」は桃生翠訳で『花の寺』（1940年1月）に、「傑老叔」は山本三八訳で『蚕』（支那現代文学叢刊Ⅱ、1939年12月）に収められている。『兵隊』28号の目次には3作品すべてが吉武訳であるかのように書かれており、転載である旨は一切記されていないが、本文をよくよく見ると、「冬児姑娘」には謝冰心の名の隣に「吉武修訳」とあるのに対して、「小英」、「傑老叔」には凌叔華、欧陽山の名のみとなっている。「傑老叔」の挿絵と編集を担当した石田が転載の事実を知らぬはずはないと思うのだが、長い年月の経過で失念してしまったのであろうか。

『花の寺』は凌叔華の14篇の短編を集めたもので、『蚕』は茅盾、老舎、沈従文、郁達夫等の短編10篇を収めた中国文学研究会編集のアンソロジー。いずれも伊藤書店発行で、桃生（本名は澤田瑞穂）、山本は共に中国文学研究会の会員である。中国文学研究会は1934年3月に竹内好、武田泰淳、岡崎俊夫ら東京

帝国大学支那哲学支那文学科の卒業生を中心に結成された団体で、機関誌『中国文学月報』[22] を刊行し、中国語の研究や現代文学作品の翻訳をおこなった。熊文莉によると、「戦前の日本で始めて（ママ）「中国」という言葉を会名とする組織でもあり、当時、明確に中国現代文学を研究対象とすると公言した唯一の研究会」[23] であった。秋吉收は「日中戦争のさなか、敵国たる現代中国のことを正面から論じようとすることは危険な行為であった。当時の日本において、中国はすべて「支那」と呼ばれたが、それを「中国」（中心の国、つまり中華思想と繋がると考えられた）と呼び、竹内を中心に設立された研究会に「中国文学研究会」と命名したこと自体、極めて勇気を要する決定であった」[24] と述べている。大東亜戦争勃発後、事務所になっていた竹内の家には、月一回、または二ヶ月一回程度、特高と警察が必ず来るようになり、いつ検挙されるかわからない状態だったという。[25] 中国文学研究会は大東亜文学者大会への参加要請を断り、1943年３月つまり『兵隊』28号の発行と時を同じくして機関誌の終刊号（第92号）を刊行し、解散に追い込まれている。[26]

『兵隊』所収の「中国現代文学選」が「支那」ではなく、「中国」を使っているのは、中国文学研究会の影響を感じさせる。『花の寺』、『蚕』が吉武の私物であったのか『兵隊』編集部所蔵のものであったのかは不明だが、戦時中の広東の陸軍報道部ではこうした本も閲覧できたのである。さらには中国語の「冬児姑娘」も入手できる環境にあった。中国に駐留している兵士が現代中国文学作品を原文で読み、翻訳・紹介したというのは、他に例を見ないのではなかろうか。1943年３月という戦況が緊迫していく時期に「中国現代文学選」のような特集を組めたのは、やはり「治外法権」によるものと考えられる。当時編集に当たった石田も「内地では出来なかったことでしょう」[27] と述懐している。

以下、「中国現代文学選」の内容を見ることにする。

４.「中国現代文学選」の収録作品

４．１ 「冬児姑娘」

謝冰心「冬児姑娘」は『文学季刊』創刊号[28] に掲載され、のちに短編小説集『冬

児姑娘』[29] に収められた。冬児にはモデルがいて、それは謝冰心が病気で入院した折に雇った付添婦の娘である。冬児の縁談が決まったと聞いて、謝冰心が祝儀を渡したところ、付添婦が冬児の生い立ちや人となりを語って聞かせた。それをそのまま記録したものがこの作品である。

（あらすじ）冬児の父は内務府で雑役をしていたが、清朝が崩壊すると仕事がなくなり、暮らし向きが悪くなったある日、失踪してしまった。冬児の母は幼子を抱えて泣き暮らしたが、冬児は母子二人の貧困生活の中、たくましく成長していった。８、９歳から家計を助けて行商をおこなうようになるが、気が強く、大人顔負けの商売をして、相手が兵隊でも怯まない。娘盛りになっても兵隊と悶着を起こすので、母が自分の妹の家に手伝いに出したら、博打を覚えてしまった。働き者で力持ちで、仕事は速くて上手いが、気難しくて怒ると怒鳴りだす。神仙すらも恐れず巫女の神棚を破壊したりするが、とても母親思いの娘である。母は冬児のことでいろいろと気をもんできたが、嫁ぎ先が決まってようやく胸のつかえが取れたのであった。

1951年11月に翻訳集『お冬さん』を刊行した倉石武四郎は、「冬児姑娘（お冬さん）」について「その（付添婦の）話に耳を傾けた女士はお婆さんが帰るとすぐ筆をとってそのことば通りに記録したもので、女士にいわせれば全く骨が折れずに書けており、しかも最も愛すべき作品であるという。ことにお婆さんのひとりがたりという形をとってあり、自然完全な北京の話しことばで書かれているのは、文語風の描写を得意とする女士にとって文体からいっても珍らしい。何よりも封建的な教育や環境によってゆがめられない生地のまゝの人間が記録されていることはまことに喜ばしい。（中略）日本語訳はこれが始めてだと思う」[30] と紹介している。

倉石は自分の訳を初訳だと誤解しているが、『兵隊』に掲載された吉武訳の「冬児姑娘」は倉石訳よりずっと早い。そして、実は吉武よりも早く「冬児姑娘」を日本語に訳した人物がいる。中山樵夫である。中山は「冬児姑娘」を1940年５月に『中央公論』[31] に発表後、さらに翻訳集『苦悶する支那　現代の作品と文学史』[32] にも収めている。つまり「冬児姑娘」には中山訳（1940年５月）、

吉武訳（1943年３月）、倉石訳（1951年11月）の３種があるのである。中国現代文学作品のうち、複数の邦訳のある作品はそれほど多くない。そもそも多くの中国人作家の作品が翻訳されていない中で、冰心の作品は比較的よく翻訳・紹介されていると言える。何かしら日本人に作品の翻訳を促す魅力があるのであろうが、その点については稿を改めて検証したい。

ところで、吉武が中山訳を参照した様子は見られない。両者の訳を比較してみると、吉武訳の拙さが目に付く。誤訳が散見され、訳しきれなかったのか段落ごと削除してしまったエピソードさえある。不明箇所を削ったせいでわかりにくくなった物語を自分の想像力で補っており、この中国語力では一篇訳すだけでも相当な労力を要したのではないかと思われる。中山訳の存在を知っていれば転載するか、少なくとも参照したであろうから、恐らく既訳が存在することを知らなかったのであろう。それでも敢えて翻訳に挑んだところに、この作品を紹介したいという強い意志が感じられる。

編集者の石田は「中国現代文学選」を広東の生活文化や習俗紹介の一環だと語っているが、作者の謝冰心は福建省生まれ[33]で広東とは縁がない。福建も広義には「南支那」と言えるのかもしれないが、「冬児姑娘」の舞台は北京周辺だと考えられる。それにもかかわらず「冬児姑娘」が選ばれたのは、作中に兵士が登場するためであろう。中山訳で冬児が兵士相手に商売するシーンを紹介したい。

> それ、あの西苑には何時も兵隊がゐるでせう。ところが呼び売りする人達には兵隊さんが苦が手で、売つてお金を貰へない位はまだしも、よく引つ叩かれたり罵られたりするんですもの。でもあの子だけは兵隊さんも何のその、朝が来れば柿かなんかを担いでどんどん西苑に出かけ、あすこの練兵場の端つこに腰かけて兵隊ばかりを相手に商売しましてね。ただの一銭だつて兵隊達には掛売しないんですの。兵隊もきつういけれど、あの子はもつときうくつて、あまりのきうさに相手が笑ひ出してしまつて却つて言ひなりになる始末。やがて売るだけ売つて、帰ると言つたが最後、人が買はうとしてももう渡してやらないんです。一度なんか兵隊がうちの入口ま

で追つかけて来ましてねえ、わたしは庭で洗ひ物をしてゐましたが、あの子が入口を片足はいつたかと思ふと、すぐその後には兵隊が二人追ひすがつてゐるので、わたし達はビックリ仰天、長屋中の人がみんな家の中に逃げ込んだもんですよ。兵隊はただ笑つてどなるんです、『冬児姑娘、冬児姑娘、おいらに柿をもう二つ売つてくれよう。』あの子はふり向いて背負ひこを下におろすと、両手を腰につかへて言ひました、『売つてやらないよ、お前達には売つてやらない。物を買ふなら買ふだけでいいよ。誰がお前達にニタニタ笑へつて言つたんだい？さつさと帰つたがいいよ！』[34]

『兵隊』28号の巻頭には「兵隊評論」コーナーの入賞作「見たまゝに―支那民衆の真の指導者たるを自負せよ」[35] が掲載されている。投稿者は広東市内で目にした兵士の横暴なふるまい、例えば靴磨きの少年に代金を払わずおどしつけたり、酒店のボーイを殴りつけたりする行為について、「不愉快の情を禁じ得なかつた」と述べ、「我々はあくまで彼等に対し真に指導者的立場に止り、支配的地位を要求してはならない」、「我々の向ふべき方向と使命とを省みよ」と戒めている。「冬児姑娘」に登場する兵士は日本兵ではないが、兵士相手に一歩も引かない冬児の物語を紹介することで、兵士たちを啓発しようしたのであろう。「冬児姑娘」の挿絵には、２人の体の大きな兵士を前にしても、怯まずふんぞり返っている可愛らしい冬児の姿が描かれている。

４．２　「小英」

「小英」は凌叔華の短編小説集『小哥児倆』[36] 中の一篇。小英という５歳の少女の目を通して、封建的な結婚の悲劇を描いている。

（あらすじ）小英の叔母が結婚することになり、小英は婚礼の日を楽しみに待っている。華やかな嫁入り道具が次々に届けられ、やがて盛大な式が執り行われる。小英は叔母の姑となる老婆を目にして異様なものを感じるが、洋装の花嫁衣裳を身につけた美しい叔母は嫁ぎ先へと去っていく。婚礼から３日後、叔母は慣例にしたがって実家に戻ってきた。叔母は婚家で姑や小姑から虐げられており、涙ながらに窮状を語る。祖母（叔母の母）も悲しむがどうすること

もできない。婿が迎えに来て、家中が浮かぬ顔で叔母を見送った。小英は「叔母さんはお嫁さんにならなくてはいけないの？」と結婚への疑問を口にする。

先にも述べたように、この作品は吉武の訳したものではなく、桃生翠訳の翻訳集『花の寺』からの転載である。桃生は『花の寺』の「訳者後序」で凌叔華の作品について、「凌女士の傾向はもはや現代支那のものではない。積極的・建設的なものとはいはれない」と述べている。その上で、「進歩的資産階級の智識分子の立場に立つて、資産階級の女性を表現しつつそれらに対して不満を表示してゐる」[37] という黄英[38] の言葉を引用して、「つまり聡明なる新支那の女性の眼より見て、かなりの距離を置きつつ旧社会に生活する女性達を描写する、批判は描写の裏に蔵せられる――この主知的・客観的なゆき方が、（中略）私には珍らしくも感じた」[39] と評している。「小英」についても「幼女の無心の瞳に映る旧式結婚の無残な実情」[40] と紹介されており、旧社会の封建的な価値観や制度に苦しむ資産階級の女性を傍観者の立場で眺め描写した、凌叔華らしい作品と言えるだろう。

この「小英」が『兵隊』「中国現代文学選」の一篇に選ばれた理由ははっきりしない。兵士向きの内容というわけではなく、広東の生活文化や習俗を描いているわけでもない。凌叔華は原籍こそ広東省番禺県だが、北京で生まれ育っており、「小英」の舞台も北京と考えられる。だからこの小説を読むことで日本兵の広東への理解が深まるわけではないのだが、『花の寺』「訳者後序」には「凌叔華女士は広東の産」[41] と書かれているので、広東の作家と誤解されたのであろうか。次節で紹介する欧陽山も「広東生れ」と紹介されており[42]、広東に縁のある作家の作品を選んだ可能性はあるだろう。また、凌叔華は少女時代と新婚の時期にそれぞれ１年ほど日本に滞在しており、1930年代には日本を舞台にした作品を３篇発表している。日本に縁のある作家なので選ばれたとも考えられる。さらに、謝冰心ほどではないが、凌叔華の作品も比較的よく日本語に訳されており、日本人向けの中国語の教科書に採用されることもあった。[43]「外語の支那語」出身の吉武にとっては馴染みのある作家だった可能性がある。そのほか「冬児姑娘」、「傑老叔」は下層の労働者の生活を描いているので、富裕層を

描いた「小英」でバランスを取ったのかもしれないし、新妻が嫁ぎ先で嫁いびりに遭うというテーマが、兵士たちの興味を引くと判断されたのかもしれない。

４．３　「傑老叔」

「傑老叔」は欧陽山の短編小説集『七年忌』[44] に収められている。『兵隊』に収録されているのはその邦訳で、すでに紹介したように中国文学研究会編集のアンソロジー『蚕』所収の山本三八訳を転載したものである。

（あらすじ）主人公の傑老叔は英国人に雇われて土運びなどの肉体労働に従事する最下層の労働者である。ある日傑老叔は床に痰を吐いたと誤解されて、雇い主の英国人から殴る蹴るの暴行を受ける。濡れ衣に立腹する傑老叔に対し、キリスト教にかぶれた姪の亭主は「世界中どこへ行っても、主人と下僕の区別と云ふものは無論ある―たとへて見れば我々すべての人間が神様の卑しい下僕で、我々は何事もみな神様の御指図に従はなければならないのと同じ事なのです。天にまします我等の神は、我々の罪深いものである事を御存知になつて、我々に苦しみをお与へになるのです。我々がそれに反抗すればする程罪は尚深くなつて、更により大きい苦しみを嘗めなければならないのです」などと的外れな忠告をするのだった。プライドを傷つけられた傑老叔は土運びに行かなくなるが、収入が途絶えた上に息子が病気になり、仕事に戻るほかなかった。数日後、傑老叔の仲間が英国人宅から銀色のライターつきの煙草入れを持ち出して来て、傑老叔に進呈した。古物商が目をつけて、二円で買おうと申し出る。そこへ魚売りの団体が寄付集めにやって来る。魚屋の露店が立ち並ぶ一画に日本人の女が魚を買いに来たが、その後印度支那人の巡査が来て、女に魚を売った店の者をしょっ引こうとした。魚売りたちが大勢でかかっていくと、巡査は逃げていったが、今度はフランスの水兵が隊列を組んでやって来て、魚屋の兄弟二人を連れて行ってしまったので、彼らを救うための寄付を集めているのだという。傑老叔は盗品の煙草入れを古物商に二円四十銭で売り払い、二円を寄付すると宣言する。

あらすじをまとめると上記のようになるが、風景描写と登場人物の断片的な

会話が続き、状況説明の少ない構成であるため、ストーリーを把握しにくい。列強の横暴に虐げられる広東の労働者を描いているが、会話が下世話で品がなく、傑老叔やその仲間にも感情移入しづらい小説である。訳者の山本は欧陽山を「彼が支那文壇の一異色として注目されてゐる所以は、その作品が全部広東地方の下層階級の生活に取材され、筋の殆んどない断片的な情景描写の中に人物の性格を浮彫りして行く技法の清新さにある。自然描写には豊かな南国人の感覚があり、(中略) 或は西欧風の異端作家と云へるかも知れない」と評し、「傑老叔」を「可否共に彼の特色を最も端的に窺ふ事が出来ると云ふ定評のある作品である」[45] としている。

山本は敢えて言及していないのであろうが、この作品の特色は列強の横暴に耐えかねて、団結して戦おうとする労働者たちを描いている点にある。主人公の傑老叔は、元々はそうした運動には関心がなかったが、自らが濡れ衣を着せられて殴られるという屈辱を受け、寄付という行為によって労働者側に立つのである。最下層の労働者の目覚めを描いており、キリスト教批判も含めて、欧陽山の思想・信条の表れた作品と言えるだろう。

傑老叔を殴ったのはイギリス紳士で、魚屋たちを逮捕したのはフランス水兵だが、日本人もまた欧米列強側の一員として描かれている。日本人の女の買った魚に問題があったせいで、魚屋の兄弟が逮捕されるに至ったからである。魚を買ったのが中国人であれば、このような事態にはなるまい。

この作品は「中国現代文学選」の3作品中もっとも長く、「冬児姑娘」、「小英」の倍ほどの紙幅を費やしている。完成度の高い作品とは言えないが、『兵隊』編集部の所在地である広東を舞台にしており、植民地支配下に暮らす中国人労働者たちの心情・実情を実によく伝えている。「冬児姑娘」と同様に兵士たちを啓発する目的で掲載されたのであろうが、『兵隊』にはこのような作品も掲載されているのである。

5．結びに

『兵隊』「中国現代文学選」には冒頭に解説が付いている。[46] まず「支那文学」

に文語と口語の二つがあることを述べ、新しい文学運動が起き、「死せる古文の正統な継承者として白話が主張されると共に、生きた言葉によつて産出される生きた文章が提唱された」と新文学を肯定的に評価している。さらに、記憶されるべき人物として、康有為、梁啓超、胡適、陳独秀、魯迅、周作人、張資平、謝冰心等の名前を列挙し、続けて「支那事変の勃発とゝもに、奥地重慶に退避した抗日政権に追随した多くの作家の運命はまた抗日政権の末路と共にあるであらう。昨年の大東亜文学者大会には、（中略）周作人[47] 以下の新中国の代表者が参加した。いまや新中国の文化が文学史上の空白期、暗黒時代を超へて、稚い健やかな芽生へを見出し、共栄圏文化の一環として生れることが期待される」と前年に開かれた大東亜文学者大会を賞賛している。

謝冰心は1938年に北京を離れて雲南に移り、その後重慶に転居している。凌叔華は「支那事変」前から武漢在住で、日本軍の進軍にともない四川に移った。母親の葬儀のため1年あまり北平に滞在した時期もあるが、多くを国統区で過ごしている。つまり、「抗日政権に追随した多くの作家」のうちの二人ということになる。欧陽山に至っては、1932年に中国左翼作家連盟に加入し、抗日戦争中は各地で抗日文化活動に従事し、1940年に共産党に入党、1941年には延安に入っている。大東亜文学者会議について言及しながら、謝冰心たちの作品を選び、淪陥区に留まり対日協力者となった周作人や張資平等の作品を選ばない所に『兵隊』編集者の姿勢を見て取ることができるだろう。

解説には「こゝに訳載した小説は特に優れた作品の紹介としては適当な選ではないかもしれぬ」が、「編輯者の企図したのは（中略）この作者たちに裸で語られなければならなかつた中国の姿、新しい中国の中に執押に食ひさがつてゐる古い精神、古い殻の中に生き抜いて来た強靭な生活力、と云つたものをこの記録の中から鮮明にし、理解して欲しいと云ふことであつた。中国の永い歴史と云ふものはこの押しひしがれてもなほ新しい季節には芽ふく植物の勁い生命を持つ民衆の中に生き、伝へられて来たと云ふことを知るべき」だと記されている。1943年の広東にはこのような中国理解を備えた日本兵がおり、それを中国戦線にいる兵士たちに伝えられる雑誌『兵隊』があったのである。

注

1）本稿は刀水書房の復刻『兵隊』2004年７月による。「南支派遣軍」は通称で、正式名称は第二一軍と思われる。

2）終刊の時期は不明。現時点では39号までの発行が確認されている。

3）創刊号から９号まで編集長を務めたが、除隊したため編集部を去った。

4）中野綾子「慰問雑誌にみる戦場の読書空間――『陣中倶楽部』と『兵隊』を中心に――」『出版研究』45巻、p151、2015年３月。

5）掛野剛史は「書く兵隊・戦う兵隊―火野葦平と雑誌『兵隊』」で「書く兵隊」の姿を紹介している。『アジア遊学167 戦間期東アジアの日本語文学』pp172-182、勉誠出版、2013年８月。

6）大濱徹也「雑誌『兵隊』解題 兵隊の眼―雑誌『兵隊』が問いかける世界―」p5、復刻『兵隊』付録、刀水書房、2004年７月。

7）中野綾子「緩やかな動員のためのメディア―陸軍発行慰問雑誌『兵隊』をめぐって―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊24号（1）、p45、2016年９月。

8）前掲「慰問雑誌にみる戦場の読書空間―『陣中倶楽部』と『兵隊』を中心に―」pp152-153。

9）日本画家。東方学会で常務理事、事務局長、顧問などを務めた。復刻『兵隊』出版時には健在であったが、2012年４月27日に逝去。

10）石田一郎「雑誌『兵隊』の編集者として」刀水書房HP（http://www.tousuishobou.com/heitai/heitai.htm）2019年10月27日閲覧。

11）石田一郎、大濱徹也、鈴木正夫「兵隊の投稿雑誌『兵隊』をめぐって」『刀水』No.6、p12、刀水書房、2002年５月。

12）原田勝正「復刻雑誌『兵隊』を読む」『刀水』No.8、p16、刀水書房、2004年11月。

13）治安維持法違反等の容疑で60数名が検挙され、30数名が治安維持法違反で有罪となり、特高の拷問によって獄死者４名、保釈直後死者１名、負傷者30数名が出たとされる言論弾圧事件。

14）横浜事件・再審裁判=記録 資料刊行会/編『ドキュメント横浜事件』p15、高文研、2011年10月。

15）畑中繁雄『日本ファシズムの言論弾圧抄史』pp45-67、高文研、1992年８月。

16）前掲「緩やかな動員のためのメディア―陸軍発行慰問雑誌『兵隊』をめぐって―」pp43-44。

17）山田良一「妻へ」『兵隊』35号、p13、1944年１月。

18）今泉彰雄「敵少年兵」『兵隊』11号、p29、1940年１月。

19）櫻井貞光「哀れ娘子軍」『兵隊』14号、p46、1940年４月。

20）所属部隊・肩書等は不明。『兵隊』26号-36号に挿絵を描いている。

21）前掲「兵隊の投稿雑誌『兵隊』をめぐって」p15。石田はさらに前掲「続・雑誌『兵隊』を読む」ｐ７においても、「一八年に、私たちより後に分遣されてまいりますが、その中で外語を出た幹部候補生の下士官四人か五人で、中国文学を専攻してたという、そういう人はもう、翻訳をやるとかいうようなこともできるようになりましたしね」と述べている。

22）第１号は1935年３月発行。第60号（1940年４月）以降は『中国文学』に変更され、途中休刊をはさんで第105号（1948年５月）まで続いた。

23）熊文莉「中国文学研究会にとっての「翻訳」」『朝日大学一般教育紀要』第36号、p15、2011年１月。同論文はpp15-19で中国文学研究会が「中国」を会の名称に使用した理由について考察している。

24）秋吉收「『中国文学（月報）』と中国語―竹内好らの活動を軸として―」『中国文学論集』第35号、p62、九州大学中国文学会、2006年12月。

25）立間祥介編「中国文学研究会年譜」『復刻中国文学別冊』p64、汲古書院、1971年３月。

26）戦後の1946年３月に「復刊号」を刊行して会を復活させた。

27）石田一郎、大濱徹也、田中綾「続・雑誌『兵隊』を読む」『刀水』No.11、ｐ７、刀水書房、2008年７月。

28）『文学季刊』創刊号、1934年１月。

29）冰心『冬児姑娘』北新書局、1935年。

30）謝冰心著、倉石武四郎訳『謝冰心自選集お冬さん』pp192-193、河出書房、1951年11月。

31）謝冰心著、中山樵夫訳「冬児姑娘」『中央公論』55巻５号、pp159-165、中央公論社、1940年５月。

32）中山樵夫訳『苦悶する支那 現代の作品と文学史』萬里閣、1941年２月。

33）謝冰心は原籍は福建省長楽県だが、幼児期は煙台で過ごし、その後北京に移って教育を受け、執筆活動を始めた。

34）前掲謝冰心著、中山樵夫訳「冬児姑娘」pp161-162。

35）北浦三郎「見たまゝに」『兵隊』28号、pp2-3、1943年３月。

36）凌叔華『小哥児倆』良友文学叢書、上海良友図書印刷公司、1935年10月。

37）黄英編『現代中国女作家』p127、北新書局、1931年。

38）中国の文芸評論家、戯曲家、文学史家。原名は銭徳富。ペンネームは黄英のほか阿英、銭杏邨など。

39）桃生翠「訳者後序」『花の寺』pp263-264、伊藤書店、1940年１月。

40）前掲「訳者後序」p266。

41）前掲「訳者後序」p264。凌叔華の原籍は広東省番禺県。

42）「傑老叔」訳文の前に付された「欧陽山略伝」『蚕』支那現代文学叢刊Ⅱ、p242、伊藤書店、1939年12月。欧陽山の原籍は湖北省荊州で、貧しい家庭に生まれ、他家に売られて養子となり、各地を流浪する生活を送った。「広東生れ」は誤りだが、後に広東で教育を受ける機会を得て、小説を書き始めている。

43）藤井省三『東京外語支那語部　交流と侵略のはざまで』によると、1920年代より東京外語支那語部の教員らが中国現代文学作品を収録したテキストを編纂するようになり、凌叔華の作品を収めたものもあった。P49、朝日出版社、1992年９月。

44）欧陽山『七年忌』傅東華主編創作文庫20、上海生活書店、1935年３月。

45）前掲「欧陽山略伝」『蚕』p242。

46）吉武修の筆によると考えられるが、筆者名は記されていない。

47）周作人は大東亜文学者会議には参加していない。